

来て、見て、触って実感した3日間 復興のこれからと過去に思い馳せ



福島をのびなく旅
3日目

▲天神岬から見下ろす榑葉町の風景。防潮堤が二重に設置され、その内側には防災林が育てられて、津波被害をなるべく減じられるよう町が作られている。奥に見えるのは火力発電所で、海にはサーファーの姿も見えた。天神岬では東京大学大学院の開沼博先生(写真右下)の解説を聞いた。



速報新聞

キマグレ

発行所
彦根東高等学校

新聞部

彦根市金亀町4番7号



▶リップルンふくしまは体験型の展示が中心。写真上は放射線量の変化がわかる展示、写真下は埋立処分に使われる部材

9月16日〜18日にかけて行われた環境省主催のイベント「福島、その先の環境へ。環境再生事業現地見学会」に本校生7名が参加した。
3日目の18日は天神岬から榑葉町や海の様子を見たあと、3グループに別れてそれぞれ、特定廃棄物理立情報館リップルンふくしま、とみおかアーカイブ・ミュージアム、東京電力廃炉資料館にて、解説を聞いたり体験を行ったりした。その後、全体で中間貯蔵施設を見学した。

中間貯蔵施設ではバスをお

りて高台から敷地内の作業の状況を聞いた。新聞部2年の伊東大舞さんは「3月末にも中間貯蔵施設に来たが、そのときには見えたベルトコンベアなどの施設が今は解体・撤去されていて見えない」と作業の進展の速さに目を見張った。その後、除染後の土を埋め立て、覆土などをかぶせた場所を歩き、放射線の測定機器で空間の汚染状況を調べた。リップルンふくしまでも同じ機械で空間の線量を調べていた学生からは「街中と埋め立て後の土地の上では線量がほとんど変わらない」という声があがった。

新聞部1年の田島桂さんは「聞いてはいたがイメージが持てないまま福島に来た。実際に来て、少し実感を持てた。中間貯蔵施設のために土地を売った人の話も聞いたし、土地を売らず、12年間放置されている家屋も目にした。気持ちに区切りをつけられないまま急に家を置いていかなければならなかった人たちの気持ちには、ちよつと想像できない」と言葉を詰まらせた。加えて「福島の人でも案外知らないことがあるようだった。新聞でもできる限りしっかり伝えたい」と決意を滲ませた。



▲写真左＝高台から中間貯蔵施設を見下ろす学生達。遠くには福島第一原子力発電所が見える。写真右上＝中間貯蔵施設の埋め立て後の土地に立って説明を聞いた。写真右下＝埋め立て後の土地で線量を計測し、数値を見比べた。